

炎の肖像

妹ヒロのなつく、奇妙な面をかぶった少年。女子高生を襲う恐怖と哀しみ。

choji

お面の少年(1)

古い「鉄腕アトム」の「お面」をかぶった「男の子」。

ヒロはその子をひどく気に入っていたらしい。

ウチの近くの「みどり公園」にその子が現れたのは、春の半ば、新緑の美しいころだった。

ヒロの方から、その子を見つけたのだ。

あたしの手を、ふりほどくようにしてその子のそばにってしまった。

半日仲良く遊んでた。

あたしとしては、そのときは、同級生の「モッチャン」や「トシヤくん」が公園にきてたから、「好都合」だったんだけど。。。

あたしもヒロを気にせずいっぱい、しゃべったり、遊んだり出来た。

でも、ヒロは、今では公園に連れて行くと。。。

あたしなんか見向きもせず「鉄腕アトム」のお面をかぶった男の子の方へ、走っていつてしまうのだ。

たった数週間なのに、

「コツコツ」

と、可愛い足音を立てながら、

舌足らずに、

「おねえちゃん。おねえちゃん」

と、あたしの後ばかりついてきていたヒロが昔のことに思えるくらい。

今では、

「おにいちゃ〜ん」

公園に来るとすぐにその子のそばにいつてしまう。

なんだかちょっと、最近はさみしい気分。

今日は、公園に友達もいないし。

そうだ！

「アイスごちそうしてあげよう」

と、私は思いついた。

公園のすぐそばにコンビニがあり、買ったものを食べられるテーブルや椅子（いす）が置いてあるコーナーもある。

小さい子でアイスの誘惑（ゆうわく）に勝てる子なんているはずがない。

それに。。そう。。。

アイスを食べる時なら、いくら「好きなお面」だって取らないわけにはいかないのだし。。。

あたしは正直に言って、その子の「素顔」が見てみたかった。

今日は「いいお天気」だけど、

もう、梅雨も近い。

木陰にはいっていても、少しあせばんでくるくらいの気候なんだ。

あんなお面をかぶっていて、暑くは感じないのだろうか？

「ねえ！」

と、あたしはせいっぱい明るい声で呼びかけて、遊んでいるヒロと「お面の子」に近づいて行った。

「暑いでしょう？アイス、お姉ちゃんごちそうしてあげるから、コンビニでも行かない？」

ヒロはあたしを見上げ、ほほ笑んだ。

ひさしぶりにみるヒロの笑顔のような気がした。

陽炎(1)

「うん。ありがとう、おねえちゃん」

「鉄腕アトム君もいっしょにきなさい。ごちそうしてあげる」

と、あたしは「お面の子」も誘った。

「あ！いいね」

ヒロの顔がかがやいた。

お面の子の方を向いて、笑いかけた。

「ねえ、おにいちゃんも、いっしょにアイス食べよう！」

「お面の子」は、そのヒロの誘いにも何も応じる様子は、なかった。

少しだけ静かな気づまりな時間が流れた。

「遠慮（えんりょ）しないでいいのよ」

あたしは出来る限り、親しみをこめて言った。

「いつもヒロと仲良くしてくれているんだし」

あたしは一歩、少年の方へ踏み出した。

少年の影の中に、あたしの足がはいった。

その瞬間に、ひんやりした冷気のようなものが、あたしの体の中に広がっていった。

バサバサ！

と、突然、頭上で音がした。

あたしは飛び上るほど驚いて、天空を見上げた。

ただそれは、鳥が飛び立つ音だった。

目を元に戻したとき、すでに少年はいなかった。

ヒロが公園の出口の方へ目を、やっていた。

その目はうるんでいるように見えた。

あたしもそちらに目をやった。

足早に去っていく少年の後ろ姿があった。

背の小さな「お面の子」の姿は、すぐに見えなくなった。

公園の出口に通じる道はいったんゆるやかに登り、中途から下り坂になる。

門は見えない。

公園から出ていく彼の姿は、見えなくても当然なのだが、なんだか初夏に立つ陽炎（かげろう）の中に溶けて消えてしまったように感じた。

その日以来みどり公園に、「お面の子」をみかけなくなった。

そして「アイスクリーム」を食べようと「お面の子」を誘って以来、ヒロが公園にいきたがらなくなった。

あたしが、家に帰ってくると、家の中で、「積み木」をつかってつまらなそうに、遊んでいることが多くなった。

あたしは気になって、ときどき、公園に見にいった。

けれど、ヒロを「待っている」ようにして、公園でいつも見かけた「お面の子」の姿はなかった。

みどり公園でよく会う幼馴染の「モッチャン」「トシヤくん」に訊いたけど、やっぱり「見かけない」ということだった。

ヒロと「あたし」(1)

ヒロは戸籍上は、あたしの「妹」だけれど、本当は「姪」なんだ。

お父さんの妹の「子供」

ヒロが、うちの籍にはいるまでは、かなり複雑な事情がある。

夫婦仲の悪かった叔母さんは、バツで子供のある人と駆け落ちした。でも、去年の年末、アパートが火事になって、奇跡的にヒロだけ助かった。保険のことで、叔母さんの相手の「親戚」と称する人たちの間でゴタゴタが起きた。

「ヒロ」が、「醜い争い」に巻き込まれるのを、見かねたんだと思う。

「保険金」には一切関わらないという条件で、「ヒロ」はうちの養女になった。

半年前、ヒロが、「心身回復まで」という理由で預けられていた「施設」から、保護司さんに連れられてやってきた日のことは、忘れない。よちよち歩きで、不安そうに、あたしを見上げた目が、とっても澄んでいてきれいだった。

それまで「ひとりっこ」だった、あたしは、「まるで、あなたの子みたいね」って、お母さんに「からかわれる」くらいに、ヒロと「仲良し」になった。

。。。あたしが高校で「帰宅部」のままでいる、理由は、「ヒロと一緒にいてあげるため」だ。

お父さんが会社の「シンガポール支店長」になって海外赴任。お母さんは簿記二級・宅地建物取引主任という資格を活かして、実家の「不動産屋さん」で簿記をつけたり、時には、お客さんの案内をしたりしているので、帰りは遅い。

あたしが早く家に帰れば、ヒロを「一人」にしている時間は「短くて」すむ。あたし自身は、幼稚園時代、帰宅したら、「家」で待っているか、ご近所の子といっしょに「みどり公園」で遊んで、お母さんが家に戻ってくる頃、ちゃんと家に帰る、という「生活」だったから、両親もそれで問題ないとおもっているのだろう。

でも、あたしが一番そういうヒロの「生活」に同情した。

あたしも。。。本当は。。。。

やっぱり幼稚園の送迎バスを降りたときに「迎えてくれる人」がいないのは、寂しかった。

それに「ヒロ」は、ずいぶん大変な思いをして「養女」になったんだから、あたしよりずっと心細いだろう。「そばについていて」やりたかったのだ。

でも、それって「余計なお世話」？

ヒロにとって「うるさい」？

。。。あの「お面」の子に、不吉なものを感じるのは、あんまりあたしがヒロを、心配しすぎるから？

ヒロと「あたし」(2)

今日、庭で「見た」ものは、幻影（げんえい）だったのだろうか。。。

「幻影」

そうとしか説明がつけられなかった。。。

翌日、高校から帰ってみると、ヒロは積み木で遊んでいた。

「おねえちゃん、おかえり」

と、いってくれたので、少し安心した。

でも。。。

ヒロのつくった積み木の家を見て、「いや」なものを感じた。

屋根の上に、赤い三角形の積み木が乗せられていたのだ。

「ヒロ、おうち上手に出来たね」

と、声をかけた。

「そのさ～、屋根の上の赤い『つの』みたいなのは、な～に？」

あたしは、自分で声がかすれているのに気付いた。

その答えを「自分自身」が知っていて、それをヒロから聞くのが怖かった。

「うん。燃えているの。おうちがね、燃えているの」

ヒロは、のんびりと、「楽しいこと」でも、話すように、そう答えた。

ヒロが、幼稚園から戻ってくる時間と、あたしが高校から戻ってくる時間は、急げばそう差はない。

うまくすればヒロを一人にしておくのは30分から一時間くらいで、すむ。

あたしは、高校が終わると、できる限り早く「家路」につくことにした。

不安だった。

家に戻ると。。。

ヒロは、いつも「おにいちゃん」と遊んでいた。

あたしには見ることの出来ない「おにいちゃん」と。。。

積み木を造りながら。。。

「ほら、ここがおうちの近くの『お菓子屋』さん」

四角い積み木を動かしながら、

「出発しま～す」

「お爺ちゃんと、電車にまた乗りたいね」

なんていってるかと思うと。。。

「絵本」

を「おにいちゃん」に読んでいたこともあった。

それから。。。

また、庭の「植え込」の陰で、くすくす笑いながら「おにいちゃん」と、話していることもあった。

お母さんが帰ってくる時間が、近くなって、あたしが、

「もう暗くなるわ。家にはいりなさい」

声をかけたら、

「やだ～。おにいちゃんとオウチに帰る～」

って、泣き出してしまったこともあった。

お母さんに心配はかけたくないし、本当に、途方に暮れてしまった。

梅雨のジングルベル(1)

あたしが学校が終わると、とんで帰るようになって10日ほどして「モッチャン」が、「何か心配でもあるの？」

って、声をかけてくれた。

トシヤくんもすぐに傍によってきて、「最近、付き合いわるいじゃないか？」

と、明るい声をかけてくれた。

あたしたち3人は、幼稚園時代からの幼馴染だ。中学時代、モッチャンが「登校拒否」みたいになったときに、トシヤくんも含めて数人で、モッチャンを迎えに行って、なんとか「学校」に復帰させた、なんていう「思い出」もある。

二人が、同じクラスにいてくれたことに、感謝した。あたしは、ヒロの「様子」について二人に語った。

ヒロのことを聞いて、

「あたしもそうだったよ」

と、モッチャンが、「コトモナゲ」に言ったのに、驚いた。

「小さい頃、架空のお友だち何人も創って遊んでいたらしいのよ」

モッチャンは続けた。

「両親が心配して、あたし、『心療内科』というお医者さんに連れて行かれたんだけど、『小さい子が空想で友人創るのは珍しくはありません。放っておけば自然に治ります』っていわれたらしい。

中学の時、学校にいかなかったこともあるでしょう？

その時は『空想』っていう自覚あったけれど、やっぱり、架空の『友だち』と話していたよ」

「ふ～ん」

と、トシヤくんが感心したように溜息をついた。

「モッチャン頭いいからなあ」

「え？」

って顔して、モッチャンは、トシヤくんをみた。

「『ビューティフル・マインド』っていう映画知ってる？ノーベル賞取った数学者がモデルなんだけど、彼は一生『幻覚』の中の友人と付き合っただけだよ」

って、トシヤくんが、あたしたちの顔を、ちょっと得意そうに見まわした。

映画の知識にかけて、トシヤくんの「右に出る者」はいない。

「モッチャン、中学休みがちだったのに、高校受かったし、数学クラスで一番だろう？」

「じゃ、モッチャンは、将来ノーベル賞？」

「ま、まさか。あたし今は、幻覚見えないよ」

「ヒロも頭いいのかな？数学苦手の、あたしの血筋、克服出来るでしょうか？」

「トシヤくんの血筋じゃないだけ、マシかも」

「そりゃないよ。ひ、ひどいな〜」

久々に心から「大笑い」した。

「モッチャン」「トシヤくん」と、その日は一緒に下校した。

梅雨のジングルベル(2)

二人とも、小・中学生の頃は、うちに「遊び」にきていた。その頃の話をしているうちに、あたしの「うち」に来てくれることになった。二人が、ヒロに会ってくれるのは大歓迎だった。

うちは平屋で、玄関をはいってすぐ右が、リビング・ダイニングと子供部屋、左が寝室とバス・トイレ、奥が12畳と「広め」の和室になっている。その部屋の外に「濡れ縁」が造られている。

広くはないけれど小さな池のある「庭」があり、池までは数段の「飛び石」になっている。池の向こう側に、北側はずれの「木戸」に抜ける小道がある。

「ヒロ、戻ったわよ～」

と、あたしは玄関から大きな声で呼んだ。「公園でときどき遊んでくれた、モッチャンとトシヤくんも一緒よ！」

「ヒロちゃん～。お邪魔します～」

「久しぶり。ヒロちゃん」

返事はなかった。

あたしは、子供部屋のドアを開けた。

ロフトのある六畳の洋間。

あたしは、ヒロが来てから、下のベッドを譲って、夜は、ロフトにマットと布団を敷いて寝ている。

それでもスペースは狭めなので、ヒロは、和室で遊んでいることが多い。

あたしはスクールバッグを子ども部屋に放り投げた。

「バッグおいといてよ」

と言って、「モッチャン」と「トシヤくん」にも、荷物をそこに置いてもらってから、和室の方にはいった。

・・・和室には「積木」が散らかっていた。

外をみやった。。。

「あっ」

と、あたしは思わず小さく叫んだ。

「植え込」にしゃがんだ、ヒロの背中が見えたからだ。あたしは、急いでガラス戸をあけて、濡れ縁から飛び石に、ソックスのまま降りた。

3足しか庭用の「サンダル」はおいてない。1足は「ヒロ」がつかっている、「モッチャン」と「トシヤくん」の分しかないと、思ったからだけど、「何だか焦る」気持ちにもかられていたんだ。

あたしは、ヒロの後ろに回った。

すっと影のようなものが、カーブしている「植え込」の方へ消えた。

「あ、あいつだ！お面だ」

すぐ後ろから、トシヤくんの声がした。

その瞬間に、あたしにも、また「植え込」の縁をかすめる、お面の「ツノ」のような部分の先端が見えたような気がした。

梅雨のジングルベル(3)

トシヤくんが、小道を駆けだした。

あたしと「モッチャン」も続いた。

「バタン」

と、木戸が閉まった。

トシヤくんが、いったん閉まった木戸を開けた。

裏は狭い道だ。見まわしたのに、そこには、人影はなかった。

「あ、あいつだ」

トシヤくんが言った。「見ただろう。確かに、『鉄腕アトム』のお面だった」

トシヤ君は、あたしや「モッチャン」より5センチほど背が高い。

もしあの子が来ていたのなら、「植え込」越に「お面」が見えたとしても不思議はない。

「あたしには、何も見えなかったけど」

モッチャンが、少し震える声で言った。

「なんか『気配』は感じた」

そのまま三人は黙ってしまった。

庭の「植え込」の切れるところに戻ったけれど、ヒロはいなかった。

和室で、積木で遊んでいる姿が見えた。

あたしは、濡れ縁に腰かけてソックスを脱いだ。

「モッチャン」「トシヤくん」も「サンダル」をのろのろと脱いで、和室にあがってきた。

「『お面のおにいちゃん』が来てたの？」

って、あたしはおそろおそろ、ヒロに声をかけた。

「ねえ。ヒロちゃん、おねえちゃんたちヒロちゃんと、遊びたいんだけどな」

って、モッチャンも声をかけてくれた。

「ひさしぶりにみんなで、『みどり公園』にでもいくか？」

トシヤくんも言ってくれた。

でもそれにも、ヒロは答えなかった。

突然。

「ジングルベル！ジングルベル！鈴が鳴る」

って、「がなる」ように歌いだした。

あたしは「ギョ」とさせられた。

「モッチャン」「トシヤくん」の顔も青ざめていた。

ヒロは、積み上げた積木を乱暴に、突き崩した。

「余計なお世話」

ヒロの言葉に、

「え？」

モッチャンが声をあげた。

ゆっくりとあたしたち三人を、ねめつけるように見まわした。

「余計なことだって、いってるんだよ」

ヒロの声は、いつものやや高い可愛い音色から、おどすような響きを感じる低いものに変わっていた。

そして、再び。

「ジングルベルジングルベル！ 鈴が鳴る！」

と、大きな声で歌いだした。

開け放されたままになっていたガラス戸の外から、サーッと庭木をぬらす音がし始めた。雨の多いシーズンが、まだまだ終わりそうにはなかった。

霊園のある街(1)

モッチャンとトシヤくんは「ほとんど何もいわない」まま帰ってしまった。

夜、ヒロが眠りに就いてから、思い切って、お母さんにヒロの様子のを話した。「お面」の少年のことは言わず、「空想」の友だちをつくっているというだけを。「小さい子が空想で友だちを作るのは、よくあることよ」

お母さんは、「案の定」モッチャンと同じことを言った。

あたしは、もどかしかった。

「ねえ、お母さん、その友だちを、ヒロは『おにいちゃん』って呼んでいるんだ。もしかしたら？」

お母さんが「ため息」をついた。

「ヒロの家族のこと何も、話していなかったわね」

立ちあがって、ガラスの飾棚の引き出しから封筒を持ってきた。

写真を数枚取りだした。

そこには、赤ちゃんのヒロを抱いた「叔母さん」「派手なシャツを着た男の人」と、「お祖父さん」らしい人に抱かれるようにして、小さな男の子が立っていた。

「おにいちゃん、って、叔母さんの旦那さんと前の奥さんの間の、『その子』かも知れないわね」

そう、お母さんは言った。

あたしは自分で自分の顔が青ざめてくるのがわかった。くいいるように「写真」のその子を見つめた。

顔からあげられた「鉄腕アトム」のお面。

それが、その子の「頭」に、着けられていたからだ。

「この子も。。。死んじゃったの？」

おそろおそろ「お母さん」に訊いた。

お母さんの目に薄く涙がわいた。

「可哀そう。これはヒロにはないしょよ」

お母さんは、ためらいながら続けた。

「その子のお陰で、ヒロは助かったのよ。火事に気付いて、ヒロを布団にくるんで、自分も一緒にアパートの二階から飛び出したの。

ヒロの『心』にも、その子のことが残っているのね。でもないしょよ。自分の身代わりで、その子が『死んだ』なんて、思ってもらいたくないの」

あたしは、うなずいた。

「いい子なんだ」

あたしは、必死に「闇の中から湧き上がってくるような、奇妙な不安」と戦いながら、「小さな

男の子の顔」を見ながら、言った。。

「いい子だよね」

あたしは、お母さんにも確かめるように言った。

「ええ。ヒロを助けてくれたのだもの」

男の子は、こっちをにらみつけるような表情で、写真に映っていた。

霊園のある街(2)

翌日、休み時間に、モッチャンとトシヤくんに、「お面の子」と、その子が「ヒロ」を助ける代わりに、「死んでしまった」ことを、手短かに話した。

「おれが庭で見たのは何だったんだ？」

って、トシヤくんは納得できないようだった。

「『集団催眠』ということもあるかも」

と、モッチャンが首をかしげた。

「みんなで『いる』って信じちゃうと『はっきり見た』という気持になるの」

「でも、公園にいる『あいつは』は『存在』してたろう」

それは「否定」できないけど。

「警察は『死亡確認』したから、両親にそう言ったんだと思うよ」

あたしの言葉に、

「それなら幽霊？やだな～」

トシヤくんが首をすくめた。

「そうねえ。確かに『みどり公園』では、遊んでいたものね。あのときは、別に『集団で催眠』にかかる、要素はなかったわね」

「うちのことで、口にしにくいんだけど」

あたしは、迷いながら言った。

「ヒロが、本当はあたしの『姪』だってことは知っているでしょう？保険金のことで、ヒロのお父さんの親戚と保険会社が、まだ、もめているの」

「ふううん。それと何か関係あるのかな？」

トシヤくんが、急に身を乗り出すようにして言った。

「誰かが、いやがらせのためにやってる？」

「もし、それが本当なら心配ね」

「警察に話せよ」

「。。。笑われるだけだと、思うんだ。変な高校生だって」

あたしは、トシヤくんの言葉に首を振った。

「東京に雑司ヶ谷という場所あるの知ってる？」

って、あたしは二人にきいてみた。

年賀状出したから叔母さんが住んでた住所は知ってる。

豊島区の東池袋という場所だ。

地図で見ると都電の「雑司ヶ谷」という駅のそばだ。「東池袋」という駅もあるけれど、そこより「雑司ヶ谷」駅の方が距離的に近そうだった。

モッチャンが、

「雑司ヶ谷墓地という大きな霊園があるところね」

答えた。

「え！墓地！オレ『弱い』よ～」

トシヤくんは、目をしばたいた。

「公園みたいな場所よ。『夏目漱石』とか、有名な人のお墓もたくさんあるの。うちのアニキが、その近くの大学にいつてる」

「あ！そうだったわね」

モッチャんの「お兄さん」は、有名な私立大学に通っている。

「都電『荒川線』という路面電車が走ってるよね。地図で調べたんだ」

霊園のある街(3)

終点が、モッチャのお兄さんの「大学」と同じ名だ。

「そこがどうしたんだい？」

「ヒロがね。昔、そこに住んでいたの」

その場所を確かめてみたいと、いうと、

「何となくその気持ちわかるな」

って、モッチャんが賛同してくれた。

「ええ！墓地？」

「雑司ヶ谷霊園は観光名所だけど。。。」

あたしは、青くなったトシヤくんの言葉に、苦笑した。

あたしたちの住む「東彩玉市」から、荒川線の駅のある「王子」までは、JRを利用すれば、そう時間はかからない。

期末試験明けの休日。「ピクニック」とお母さんに断って、出かけた。結局、トシヤくんも、「付き合っ」くれることになった。

梅雨の季節も、そろそろ終わりに近く、陽光の輝く「いい日」だった。

JRの「王子駅」から、荒川線に乗りついで、「雑司ヶ谷」に降り立つ頃には、かなり「蒸し暑い」という気候になっていた。

東池袋というのは、都電の線路をはさんで、霊園の反対側の街だ。

「池袋」という、繁華街のイメージとはまるで違う街だった。

「雑司ヶ谷」の駅前通りは「懐かしい写真」の中の風景のようだった。

「東彩玉より田舎だね」

と、トシヤくんが言った。

「歴史のある街よ。あたしはここ、好きだな」

モッチャんが答えた。

商店街をしばらく行って、右に折れた場所が、「ヒロの住んでいたアパート」のあるあたりらしかった。でも、細い道へ折れると、入り組んだ道に住宅やマンションが並んでいて、手帳に記しておいた、その番地は、なかなか探し出せなかった。ウロウロしているうちに、昼近くになってしまっていた。

ふと、古い「酒屋」さんの看板が目にとまった。

「あそこで訊いてみようか？」

と、あたしは言った。

「うん。いい考え」

モッチちゃんが賛成した。

「古いお店みたいだから、きっと分かるわ」

「ここは、何かおごってもらわなけりゃね」

「了解りヨーカイ。飲み物でもアイスでも何でもいいわよ」

「それなら。ビールをグイと一杯」

「調子に乗らない！」

モッチちゃんトシヤくんのやりとりを聴（き）きながら、あたしは、二人が一緒に来てくれたことに本当に感謝した。

二人がいなかったら、知らない街で、本当に心細い思いにかられていたに違いない。

霊園のある街(4)

お店には、白髪の「おばあさん」が、一人店番しているだけだった。

アイスを買って、一本ずつモッチちゃんと、トシヤくんに渡した。

「おばあさん」に、手帳の住所を見せて、

「ここご存知ですか？」

と、たずねた。

おばあさんは、首からかけていた眼鏡をかけて、しばらく眺めていた。

「あの。。。去年、火事を出したアパートなんですけど。。。」

「ほう。それなら、お向かいだ」

おばあさんが言った。

「え！」

あたしたちは、同時に振り向いた。

そこは、建てかけのビルになっていた。

「マンションが建つそうだ。『あっ』という間に更地にして、もう骨組は出来ている。もっとも、梅雨になってからは、乾きが悪いとあって、工事は進んでいないがね」

「火は放火の疑いがあったって聞いたんですが？」

あたしはおそるおそるたずねた。

「おや。刑事かい？警察の旦那には見えないが？」

冗談なのか「本気」なのか分からない口調で言ってから、

「放火に決まっているよ」

と、ピシャリと付け加えた。

あたしは固まった。

「え。おばあさん、そんな証拠があるの？」

トシヤくんが、代わってきいてくれた。

「あの男は悪党だったからねえ。自分の子供や、連れアイ、そればかりか『親父』にまで、保険をかけて、火を点ける計画をたてていたのさ」

「そんな悪事の計画があったの、なぜ知ってるんですか？」

モッチちゃんが、あたしの方に一歩近づいて、おばあさんに言った。

「ああ。あいつの子どもが、話していたよ」

「え？子どもと言うと？」

脚がふるえた。

「古い面をかぶった、男の子さ。その話をした後は、いつも『ジングル・ベル』うたっていたなあ」

「・・・ジングル・ベル！」

絶句した。

ヒロが、怒鳴るようにして歌っていた「ジングル・ベル」が耳の中に「訝（こだま）」した。
「そ、その子は、どうしてジングル・ベルを？」

モッチャンが、おばあさんに、つかかるようにして訊いた。

ほとんど同時に、

「男の子が、父親の計画を知っていたというんですか？」

トシヤくんが、訊いた。

霊園のある街(5)

「さてねえ」

おばあさんは、あたしたちの反応を楽しみたいにして、答えた。

「あの子は、父親より悪党だったからなあ。あのチビに、脅されて、金を取られた情けない中坊が、たくさんいるんだよ。あれは、生きていたら『とんでもないヤツ』になっていたろうさ」

「と、とって『いい子』だったって。妹を助けるために自分の身を投げ出して、二階から、飛び降りたって」

あたしは、ふるえながらたずねた。

「笑わせるね」

おばあさんは、意地悪そうな表情を見せて言った。

「あんたら、いまさら、あいつらのことをきいてどうする。アイスが溶け始めているよ。食べておしまい」

溶けかかったアイスは、奇妙なくらい「気持ちの悪い甘さ」で、あたしの口の中にひろがった。

「その子の、お面の子の妹は、『ヒロ』は、今はあたしのウチの子なんです」

自分の声が半分泣き声になっているのに気付いた。

「おや。そうかい」

おばあさんは眼鏡をはずした。

「あの子は可愛い子だったなあ。悪党の連れ合いも、なかなかいい『お母さん』だったようだから、そちらに似たんだろう」

「どうして、警察にそのこといわなかったんですか？」

トシヤくんが、じれたように言った。

「つまらないことには関わりたくないよ」

「火を点けたのに、本人は、お酒を飲んで眠ってしまって、焼け死んでしまったんですか？」

モッチちゃんが、静かにきいてくれた。

「火を点けた本人だって？」

おばあさんは薄く笑った。

「ああ。あのマヌケな悪党か。手前が、親父にまで保険をかけてるてえのに、自分の方が『子ども』に焼き殺されるとは、夢にも思わないのだから、マがぬけてるしかいいようがないよ」

「じゃ、じゃあ。火を点けたっていいのは。。。」

気が遠くなりそうなのをあたしは、必死にこらえた。

「お嬢ちゃん。あの『可愛い子』が、あんたの家の子になったのなら、教えておいてやるよ。

お面のボウズが、先手を打ったのさ。

悪党の『親父』は、年末のドサクサに紛れて放火を考えていたようだ。

だがな、ボウズが『ジングル・ベル』を、歌っていたのは、その前、『クリスマス』に『決着』をつけるつもりだと、あたしや察していたよ。その通り、クリスマス・イブに火がでたという

わけさ」

霊園のある街(6)

「そ、そんな。でも、お面の子も死んでしまったって。。。」

「そこが、子供さ」

おばあさんは、薄笑いのまま続けた。

「あのボウズは、私の強い奴だった。

あいつは、実の父親も、その連れ合いの方も嫌い抜いていた。

が、妹だけは、ひどく可愛がっていたよ。

それと、祖父（じい）さんは、嫌っていなかったな。

お面は、祖父さんが子供の頃に、祭りで親にかってもらったものだったそうだ。

そいつを、孫にやったんじゃない。

それを大切に、いつもかぶっていた。

命取りの原因さ。

あたしゃ、ボウズが妹を布団にくるんで落とした後、火を点けたと『にらんで』いるよ。だが、そのときも『面』をかぶっていたのさ。

お嬢ちゃんたちは知らんだろうが、昔の『面』はな、『セルロイド』といって、引火しやすい材料で出来ていたからのう。

飛び降りたはいいが、面にはすでに火が点いていたのだろう。その炎が全身に回ったのさ。

消防のサイレンで起こされて、店から出てみると、もうボウズは半分黒焦げになって、いたわ。

まだ、この世に未練があると見えて、泣きじゃくっている妹の方へ伸ばした手が、まだピクピク動いていたがなあ」

あたしの手の中にあつたアイスの半分が、溶け落ちて、手を濡らした。

「お嬢ちゃん、店を汚さんでくださいよ」

「ご、ごめんなさい」

あたしは、突然、悪夢から「起こされた」ような気分になった。

「気をつけることだな」

「・・・店、おそうじします」

「そんなことを言ってるんじゃない」

おばあさんの表情から薄笑いが消えた。

「この辺は、墓が多いせいか、それとも、このくらいの年齢（とし）になると『幽界』と『この世』の区別がつかなくなるのかのう。あのボウズが、この辺をまだウロウロさまよい歩いているのが、見えるのじゃ。。。」

あいつの『妹』さんが、あんたの家の子になったのなら、そっちの方にもさまよい歩いて、いるかも知れん。

我の強いやつほど、『あの世』には成仏せんものじゃ。

あいつは『妹』を取り返すまで、この『世界』にとどまる気かも知れん。

そこでおばあさんは、一息ついた。

それから、ゆっくりと続けた。

「現に、わしには、あんたらを見張っているヤツの気配が感じられるがの」

霊園のある街(7)

あたしは、はじかれたように外に飛び出した。モッチャンとトシヤくんも、店から飛び出してきた。

「あ！あれ」

モッチャンが、建てかけのビルの上を指差した。

そこには。。

屋上の「梁（はり）」から、じっとあたしたちを見つめている、あの「少年」がいた。

「ウチへ帰る！」

あたしは叫んだ。モッチャン、トシヤくんもうなずいた。

恐怖があたしを包んでいた。

「仮面の子」は、何をたくらむだろう？

とにかくも一刻も早く「家」へ帰ることだ。必死で『雑司ヶ谷』の駅に戻ろうとした。何とか、ヒロを「幼稚園」のバスが到着するまでに、送迎場所で待っていてやりたかった。

それなのにあたしたちはウロウロと、小道や岐れ道の多い「住宅街」の中を、迷って、「駅前通り」に出られなかった。モッチャンが、途中で、ケータイのGPSを見てくれたけれど、小さな画面では、はっきりと分からなかった。

頭が混乱して、三人とも一種の『パニック』に陥ってしまっていたのかも、知れない。

照りつける、梅雨明け間近くの「太陽」が、キラキラとあたしたちをあぶった。

駅前の通りに出て、都電の駅に到着するまでに、小一時間も浪費してしまっていた。

電車は、5～6分置きにくるはずだった。

その待っている時間が長かった。

「ようやく」という感じで、電車が車体を見せながら、ゆっくりとこちらに向かってきた。あわてて電車に乗り込もうとした。

タラップを登り、顔をあげた。。

乗客たちが、一斉にこちらを見た。

その瞬間。

あたしは、

「うっぐう」

と、自分自身でも「奇妙」が、自然に喉の奥から飛び出すのを感じた。

モッチャンが、

「キャー」

と、叫んだ。

「うわあああ」

トシヤくんも悲鳴を上げた。

乗客たちは。。。

全員が、「古い『鉄腕アトム』の面」を着けていた。

「お面」の目からチロチロと「炎」があがった。

炎は、たちまちのうちに、乗客全員の面におおわわれた顔を包んだ。

すぐに全身が燃え上がった。

そして炎は、電車内部まで燃え広がり、灼熱の地獄に変えた。

意識が遠のいた。。。

タラップから体が落ちるのを感じ、そのまま「闇」の中に、心はのみこまれて行ってしまった

。

失われし者(1)

「おい、君たち」

という声に、ようやく意識をとりもどした。

「都電」の会社の制服を着た中年の男の人が、あたしを見ていた。

あたしは倒れているのに気づいて、立ち上がって、服の汚れを払った。

両隣りにいた、モッチャンと、トシヤくんも立ち上がった。

「中学生かね？高校生かね？」

と、制服の中年男性が、疑うように「あたしたち」を見まわした。

「高校です」

と、トシヤくんが答えた。

「学生証は持っているのかい？」

トシヤくんが「しまった」という顔をするのが横眼でうかがえた。

「持ってます」

モッチャンが答えた。

「あたしもです」

と、答えながら、心がジリジリしてくるのを覚えた。

あたしは、自分の時計に目を落とした。

一時をはるかに回っていた。

「酒かい？」

男の目がきびしくなった。

「それとも、薬でもやっているのかい？今日は学校をさぼったのか？」

「い、いえ。学校は、お休みなんです」

あたしは、持っていたエコ・バッグから、学生証を取りだして、渡した。

モッチャンも学生証を、手渡した。

「高校一年か。学校が、休み？平日だよ？夏休みにはまだ間がある」

探るように、男があたしたちを、もう一度見まわした。

トシヤくんのところで、視線がとまった。

「君は？学生証は？」

「今日は、忘れました」

「東彩玉市から、学校を『ずるけて』何しにきたんだ？」

あたしの学生証を見ながら、男が訊（き）いてきた。

「今日は期末試験明けの休みなんです。疑うなら当直の先生に電話してください」

モッチャンが、横から答えてくれた。

「休みを利用して・・・荒川線に乗りに来たんです」

失われし者(2)

「オレたち残るから、この子だけは帰してやってよ」

トシヤくんが気迫のある声で言ってくれた。

「本当に、この子は帰らなければならないんです」

モッチャンも言った。

だけれど逆効果だった。

「そのエコ・バッグに何かはいつているのかな？」

あたしをじっと見据えて男は言った。

「ちょっと。待ちなさい。今、警察を呼ぶから」

「保安部」と名乗った男は、腰にさげた革のバッグから「業務用」らしい大きな無線電話を取り出した。

そのスキに。。。

あたしは思い切ってホームから、線路に跳んだ。

反対側までかけていき、線路わきの道路につながる、急な「斜面」を登った。

ガードレールを飛び越えて、道に降りた。

ちらっと後ろを振り返ると、モッチャンとトシヤ君が、男の前に立ちふさがって、何か必死に弁明しているのが見えた。

あたしは、線路横のやや登り坂になっている道を必死にかけた。

何度も見た地図を思い出していた。

ここから「千登勢橋」という電車を「高架」でまたぐ橋に出るはずだ。

そこが、「目白通り」だ。

JR山手線の「目白駅」までは、うまくタクシーがつかまれば、数分で到着する。

「千登勢橋にパトカーが待っている」

そんな風に思って背筋が寒くなったけれど、さすがに、警察の姿はなかった。

でも、タクシーもとまってくれなかった。

あたしは目白通りを渡り、長く続く「学習院」の塀に沿って、必死に「目白駅」まで駆けていった。

「東彩玉」の駅に着いた頃には、二時半を過ぎていた。うちまでは、そこからまたバスにのらなくてはいけない。

じりじりと時間が過ぎ去っていく。

バス停留所の「みどり公園」で降りた。

その少し先が、送迎用の幼稚園のバスが、いつも停車する場所だ。そこにバスが、「まだ停まっている」のが見えた。

あたしはさすがに、胸に安堵の気持ちがあふれるのを覚えた。

あたしは少しフラフラしながら、にぎやかにバスを降りてくる生徒たちと、それを迎えるお母さんたちの方に向かって歩いて行った。

あたしが「幼稚園」の「年長組」に通っていたときの「先生」で、今は副園長先生になっている「シノブ先生」の後ろ姿が見えた。

失われし者(3)

「先生」

と、声をかけた。

先生はニコニコしながら振り向いた。

「あら！ヒロちゃんのお姉さん。お久しぶり。すっかり大きくなったわね」

「ヒロは？」

あたしは疲れた声で、訊いた。

「え？」

シノブ先生は、不思議そうな顔をした。

「幼稚園の方に、お兄さんが迎えにいらしたわよ。まだ小学生でしょう？」

でもしっかりした子みたいだったし、ヒロちゃんも『お兄ちゃんと、オウチに帰れる。嬉（うれ）しいなあ』って、喜んでいたので、一緒に帰ってもらったわ。

子供のアシで、ここまで歩いても、30分もかからないし。すぐにオウチに戻ってくるわよ」

あたしは、しばらく「言葉」を失った。

突然涙がこぼれてきた。

先生に「戸惑い」の表情が生まれた。

「。。。先生、その子は『お面』をしていませんでしたか？」

「ええ？」

あたしの「奇妙な問い」に、しばらく思いだすようにしてから、先生は答えた。

「そういえば、頭のところに『お祭り』で売っているような、お面を着けていたような気がするわ」

「その子。その子はウチの子じゃあないんです」

あたしは声をあげて泣き始めていた。

「その子は『この世の子』でもないんです」

心の中では、そう「先生」に訴えていた。

ヒロは、その日から「わが家」から消えてしまった。

「おねえちゃ〜ん」

と呼ぶ、あの「少し高い甘えた声」は、家から去って戻っていない。

警察は「保険金関係」のもつれからの「連れ去り事件」として「捜査」しているようだが、当初、事情聴取やら何やら「騒いだ」だけで、何の成果もあげられていない。

お父さんも「一時帰国」したけれど、警察に「くれぐれもヒロを無事に見つけ出してほしい」とお願いしただけで、すぐに「シンガポール」に戻ってしまった。

モッチャン、トシヤくんとは、今でも『友だち』だけれど、「ヒロの事件」については、タブーのように決して「話題」にはしていない。

夏休みのある日、「雑司ヶ谷」の街を、ひとりで訪ねた。
けれど、あの古びた酒屋は、シャッターが閉まっていた。

「忌中」

の、紙が貼られていた。

多分、あの店番をしていた「おばあさん」が亡くなったのかも知れない。。。

足音の訪れ(1)

あたしは、雑司ヶ谷から帰った日に、お母さんが見せてくれた写真をおそるおそる取り出した。

少年は、こちらを見据（す）えて映っていた。

写真に映った人たちが、「今は誰もいない」という事実、胸を締め付けられるような気分になった。

耳の錯覚か、

「おねえちゃ〜ん」

「おねえちゃ〜ん」

飾り戸棚の一番下の引き出しから、微かなヒロの声を聴いたように思った。

そこには、ヒロも映った「あたしたち家族」の写真が、大きな写真立てにいれたまま、はいつているのを思い出した。

お母さんが、

「何を思ったのか？」

あのヒロの消えてしまった日以来、そこに放り込んで、蔵（しま）ってしまったのだ。

引き出しを開け、写真を取り出した。

そこには、写真を写した時には、「いるはず」もなかった、「お面」をかぶった少年が、ヒロの肩に両手をかけて、「あたしたちと一緒に」に映っていた。

お母さんもあるいは「これを見た」のかも知れない。

それでこの「写真」を「隠した」のかも知れない。

別に「恐怖感」も何も抱かずに、静かな心で「そう」思った。

あたしは「写真立て」の裏ぶたを開けて、写真を取り出した。

写真の中の「少年」を見ると、心の中に「恐怖」よりも激しく「憎しみ」の気持ちがあつた。

破り捨ててやろうかと、思った。

足音の訪れ(2)

その時だ。

「ボッ」と音がして、写真の中の「お面」が燃えだしたんだ。

「おねえちゃ〜ん」

と、また声が聴こえたように思った。

写真の中から、ヒロの手が伸びてきた。

そう思えた。

今、ヒロは「おにいちゃん」ではなく、「あたし」を呼んでいるんだ。。。

「助け」を呼んでいるんだ。

あたしはためらわずに、その手をにぎった。

あたたかく柔らかな「感触」が「確かに」あった。

「おねえちゃ〜ん」

今度は、はっきりした声があたしの耳に届いた。

あたしは必死にヒロの手をひっぱった。

でも、写真の火は、たちまちのうちに映像を焦がしていった。

ヒロの手が、耐えられないほどに熱くなった。

「あ」

叫んだ時は、遅かった。

あたしは熱さに耐えられず、ヒロの手を放してしまったのだ。

「おねえちゃ〜ん」

ヒロの悲痛な声が遠のいていった。

あたしは「はっ」と思いついて、洗面所に写真を持っていき、水道の水をかけた。

けれど、火を消しとめたときにはもう、ヒロの後ろに「映っていたはず」の少年の部分は燃え尽き、ヒロの足元と、それを囲む「あたしたち家族3人」の映像しか残ってはいなかった。

「焼け残った写真」

それは今は、あたしの学習机の引き出しの中に蔵（しま）われている。

夜、眠りに落ちる時。。。。

「コツコツ」

と、可愛い足音が聴こえる時がある。

「ヒロ」

の足音。。。

「おねえちゃ〜ん」

という甘い声は聴くことはできない。

焼け残った写真に映っている「足」だけが、「あたし」の姿をもとめて、どこか「知らない場所」「それでいて音が聞こえてくるほど近くの場所」を、歩いているのだろうか？

悲しみが胸に襲ってくる。

あたしの、ヒロへの「想い」は、あの「お面の子」の、ヒロへの「執着（しゅうちゃく）」に負けてしまったのだろうか？

そうは思いたくはないけれど。

夜。。。が、またやって来た。

「コツコツ」

可愛い足音を聴きながら、あたしはまた、「眠り」に就こうとしている。

(終わり)